広瀬研だより ちょっとトリビアな無脊椎動物の話

Text=Rie Nakano
Photo=Yuzo Ota, Nagaaki Sato

第2回 ウミクワガタのダイナミックな吸血ライフ

（01）は本州産のソメワケウミクガワタのオス成体（左側）とメス成体（右側）。昨年11月に『どうぶつ奇想天外』で紹介されたのでご存知の方も多いはず。いっぽう（02）は沖縄産ウミクワガタの未記載種のオス成体、およびその標本写真（03～05）。オス成体（03）とメス成体（04）と幼生（05）はそれぞれ形が全く異なり、幼生はオスメスの区別がつかない。だから一見しただけでウミクワガタのメスや幼生だとわかる人はほとんどいない。論文でもオス成体だけを記述したものが多く、太田さんのようにメスや幼生の形態まで詳細に記述した研究者は少ない。写真01＝佐藤長明（ダイビングサービス グラントスカルピン）写真02～05＝太田悠造

うちの先生のご専門はホヤだ！と前回書いたばかりだが、我が広瀬研究室にはホヤ以外の無脊椎動物を扱う学生が何人もいる。そのひとりが私の1学年先輩である太田悠造さん。現在博士後期課程1年次で、研究対象はウミクワガタだ。

このウミクワガタ、分類上はクワガタムシよりフナムシに近い生き物だが、難しい話はさておこう。先ずは太田さんとウミクワガタの出会いから。

「学部の2年次に広瀬先生の実習を受けるつもりが、盲腸で入院してしまって受講できなくなったんですよ。で、3年生になって、そろそろ卒論のテーマを決めないといけないタイミングで受講し直し、そこで本州産のシカツノウミクワガタの標本を初めて見たんです。見た瞬間『オレはこいつに決めた！』と思いました」

大顎の発達したクワガタムシ似のカッコよい姿に、昆虫少年だった太田さんはぐっときたわけだ。

ところが当時沖縄で見つかっていたウミクワガタは1種程度。どれほどいるかもわからなければ、どこにいるのかもよくわからない。先生も「採集できない生物は研究できないよ」。しかし太田さんは諦めず、ウミクワガタを求めて沖縄本島を捜し歩いた。そして半年後、ウミクワガタがどっさり入ったカイメンをついに発見。先生からの許可も出て、めでたく研究スタートとなった次第。その後順調に新種記載論文を発表し、今や大学院生にして海外のウミクワガタ研究者からも一目置かれるようになった太田さんだが「もしあの時盲腸になっていなかったら、今頃はウミクワガタではない動物を相手にしていたかもしれません」。

太田さんとウミクワガタの
運命の出会いを演出したカイメン

人と人との出会いと同様、研究者と研究対象にも合縁奇縁は存在するのだ。

実際にウミクワガタは、それくらいの縁がないと出会えないような生き物である。というのも、オスの成体（大人）でも1cmもない小ささだからだ。

そんな小さな生き物のくせに、ライフサイクルはダイナミックである。

生まれたばかりの幼生（子供）はまず、泳いで魚にたどり着き、その体表から血を頂戴する。陸のクワガタの幼虫は朽木を食うが、ウミクワガタの幼生は吸血だ。

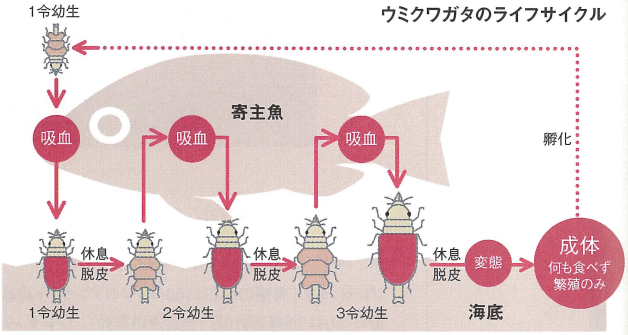
おなかがはちきれんばかりに血を吸ったら、幼生は魚から離れて海底に降りる。そして吸った血液の栄養分だけを頼りに、しばらく絶食して過ごす。やがて脱皮し、再び吸血するために海底から泳ぎ出す。

しかし常に首尾良くいくとは限らない。吸血行為の最中にホンソメワケベラなどのクリーニングフィッシュに食われてしまうこともある。そんな危険も顧みず、数ミリ程度の小さなムシが大海に泳ぎ出る。ある論文によると、2mmの幼生が1秒に20cmも泳いだという。これは体の長さの100倍もの距離を、たった1秒で移動するということだ。

死と隣り合わせの大冒険と、海底での休息脱皮。これを3回繰り返し、3度目に海底にたどり着いた後、幼生は変態して成体になる。その後はオスもメスも、もう血は吸わない。あとはやりまくるだけだ！　とばかりにオス成体は繁殖に精を出す。ハーレムを作る種もあるという。1回産卵したメスは用済みとなって死んでしまうが、種によっては産卵し終えたメスをオスが巣穴から放り出すこともあるそうだ。なんと身勝手な男、いや効率的なオスとメスのありようであろうか。

生涯に3回しか食事をせず、すごいスピードで海を泳ぎ、大人になったら精力絶倫。小さいくせに豪快な人生（?）を送るウミクワガタ。太田さんのような元昆虫少年やエビカニマニアの皆さん、ぜひ一度、じっくり海底を捜してみてくださいね。

ウミクワガタのライフサイクル



文＝中野理枝

Profile≫'87年OW取得。96年あたりからウミウシに目覚める。小野篤司さんの『ウミウシガイドブック1』『沖縄のウミウシ』を編集。『本州のウミウシ』を編集・執筆。'07年4月、琉球大学大学院に進学。雑誌・書籍の編集や執筆の仕事を続けながら広瀬研究室にてウミウシ研究に邁進中。

監修＝広瀬裕一
琉球大学理学部海洋自然科学科教授・理学博士

Profile≫'91年理学博士取得。その後3つの大学を転々として、'97年より琉球大学に勤務。ホヤ研究のため'00年に半年間ナポリに滞在したためか、かなりイタリアかぶれ。
➡www.geocities.jp/lissoclinum/TunicataJ